

27) 疱瘡絵イメージが明治から昭和初期の売薬広告に与えた影響について

“Hôsoe” has given influence to the medicinal advertisement from Meiji to Showa era.

宗像市 竹原直道

Tadamichi Takehara, *Munakata City*

はじめに：演者はここ数年感染症，なかでも痘瘡と，それを克服しようとする人間との間で繰り広げられた，闘争と馴化の文化史に興味を持ってきた．そのなかで18世紀後半に始まった江戸の妖怪ブームが，江戸庶民の文化的趣味のレベルではなく，感染症の流行と深く通底した事象であることを証明しようと試みた（「豆腐小僧と天然痘について」日本医史学会〈2009〉，「天然痘で読み解くかちかち山」日本歯科医史学会〈2010〉）．さらにその結果を「疱瘡神のパロディとしての豆腐小僧」文化/批評3：147-169（2011）としてまとめた．これは江戸時代における多様な妖怪の出現を，ヨーロッパでのミアズマ説からコンタギオン説への流れと同一の文脈のなかに捉えようとするものである．この試みが成功したか否かは心もとないが，演者の研究の方向性は理解してもらえたものと思う．

痘瘡（疱瘡，天然痘）は，江戸時代においては死因の上位を争う感染症であり，何度も大流行を繰り返していた．これに対して1824年に中川五郎治が，そして1849年にはモーニッケが持ち込んだ痘苗による種痘が，榊林宗建，緒方洪庵，伊東玄朴らの努力によって全国に広まり，明治以降痘瘡はようやく制御可能な感染症となりつつあった．そのことを背景にして，江戸時代後期においては痘瘡除けの呪物の一つであった疱瘡絵は，明治時代になると描かれなくなり姿を消していった．しかしその後も明治から昭和にかけて作られた売薬広告のなかに，イメージとして疱瘡絵の影響を残すものが散見される．今回江戸時代の疱瘡絵と明治～昭和期の売薬広告のデザインを比較することにより，江戸時代の疱瘡絵イメージが後世に残した影響について検証を試みたい．

背景：幕末期の絵画には，病気と医薬との対決をテーマとした「薬の病退治図」，「悪病退治図」，「悪病と医薬の合戦図」，「疫病神と患者の首引き図」

などが多数描かれている．これらの絵には，達磨や，鍾馗，神農などが医薬軍側の大将として登場している．この合戦図は流行りだったようで，例えば制作年は不明だが，岩瀬文庫蔵「百鬼夜行図」（『続・妖怪図巻』，国書刊行会，2006）では，絵巻の右手から左手に，武器を手にした妖怪軍が進軍しており，左手からは妖怪討伐軍が右手に向けて押し寄せている．討伐軍は薬師十二神将らしい．討伐軍の中には猪の姿も見える．神将の一人金毘羅の乗り物であろう．妖怪軍には狐や鯰，見越し入道や豆腐小僧も従軍している．この絵巻は百鬼夜行図の形式を使いながら，悪病合戦図ともなっているのである．ちなみにこの『続・妖怪図巻』には，悪病合戦図と同様のテーマの「妖怪退治絵巻」，「神農化物退治絵巻」も収録されている．このように19世紀から幕末期になるに従って，庶民の間には感染症に対してただ手を拱いているだけでなく，「闘う」という意識が顕在化してくる．そのため村境に達磨人形を立てたり，大草鞋，大人形を立てたりした．もちろんなんの効き目もなかったが．しかし，このような悪疫との合戦という捉え方は，病気になれば神仏にすがらだけというそれまでの意識からは，大きな変化の表れといえよう．

結果と考察：江戸時代に盛んに描かれた疱瘡絵は，痘瘡の平癒とともに川に流す風習があったため，ほとんど残っていない．しかし僅かに残された疱瘡絵（赤絵）の定番キャラクターとしては，達磨，木兎，駒犬，春駒，兎，熊，鯛，鍾馗，為朝，金太郎，桃太郎，力士，獅子舞，太鼓，弓矢，ばらばらなどがある．更に朱色への連想から紅葉，伊勢海老，猩々なども赤絵の意匠として用いられた．一方明治維新を経て，1906年には医師法が成立し，大正・昭和期になると，資格免許制度による医師の養成が進んでくる．しかしその養成数は少なく，無医村は大正期になってから生まれたとい

われるように、医師数は不足していた。この医師不足の隙間を補完する形で売薬産業も江戸時代に増して盛んになった。今日盛業の製薬会社で明治時代創業の会社も多い。その売薬広告には意識するとしなにかかわらず、江戸時代の疱瘡絵の影響が読み取れる。既に菓子袋の意匠に疱瘡絵の影響があることは報告されているが、薬袋のデザインにも疱瘡絵の影響が残されているのである。ただし赤絵に見られるほとんどのキャラクターが

明治～昭和期の薬袋に再び登場するにもかかわらず、藤岡摩理子（『浮世絵のなかの江戸玩具―消えたみみずく、だるまが笑う』社会評論社、2008）が指摘するように、木兎だけは消えてしまっている。

今回の発表では江戸期の赤絵と明治～昭和初期の薬袋のデザインを比較するとともに、木兎が消えた経緯とその理由についても明らかにしたい。